

## 「自画像」に映る韓国の風景

チョン・ソンテ著、吉良佳奈江訳

『二度の自画像』

東京外国語大学出版会、2021

タイから出発した〈物語の島 アジア〉シリーズが、カンボジア、チベット、ベトナムを經由して、ついにお隣の韓国にもやってきた。シリーズ第5弾として刊行された『二度の自画像』は、チョン・ソンテ（全成太）の短編集の全訳である。チョン・ソンテは寡作なことでも有名だが、作家生活20周年を迎えたひとつの節目として、『二度の自画像』というタイトルを付けたそうだ。そのため表題作は存在しない。『二度の自画像』に収録された12編の物語のなかには、南北分断や光州事件をはじめ歴史的な事象に関する作品がいくつもある。そのほかにも、少年の目に映った村の大人たちや、思い出の詰まった日用品とともに帰国の途につくウズベキスタンの出稼ぎ労働者、大統領の地方視察をなんとか成功させようと躍起になる末端の公務員など、韓国社会のさまざまな風景が物語として示される。チョン・ソンテの作品は「遠足」が断片的に翻訳されているが、日本における本格的な紹介は今回が初めてとなる。

チョン・ソンテの作品には、何げない日常を一瞬にして揺るがす事態や、朝鮮半島の歴史を背負った人物が登場する。南北の軍事境界線付近にある敵軍墓地を舞台にした「墓参」では、墓参客がいるはずのない北朝鮮軍の墓域に菊が供えられたことが大きな問題となる。墓前に置かれた菊は「三十八度線の南側に、墓と縁のある人間がいること」（242頁）すなわちスパイの存在をすぐさま想起させ、駐屯している軍人たちを緊張させる。「望郷の家」には、数十年前に北に拿捕された際、金剛山で過ごした空白の二晩について隠したまま、死期を迎える老人が登場する。北に故郷をもつ老人は、死の直前に空白の二晩について語り出す。内容は故郷の町をひそかに訪れ、祖父母の墓参りをすませたというものであった。老人は長い間、この話を誰にもすることなく韓国でひっそりと暮らしていたのである。

こうした歴史を題材としたチョン・ソンテの作品には、共通して老人が登場する。『二度の自画像』以降の作品においても、その傾向はみられる。例えば近年発表された「再会」（2019）では南北の離散家族が再会するまでの過程が、当事者の老人とその家族の視点から描かれている。ただ、無事に再会を果たしたものの、それぞれが大切にしてきた古い写真に写る両親の姿は全く別人であった。老人は違和感を抱きながらも、その事実に触れることはなかった。「墓参」の菊の花や「望郷の家」の空白の二晩のように、「再会」の家族写真も物語を謎解きのように進める原動力となっている。

何げない日常を一瞬にして揺るがす出来事は、『労働新聞』にも描かれている。作品名の『労働新聞』は、朝鮮労働党中央委員会の機関紙名であり、原題の「労働」の表記も、韓国の「ノドン」ではなく北朝鮮の表記にならった「ロドン」が用いられている。反共主

義国家の韓国において、こうした作品名を付けることは長らく禁じられていた。作品に描かれているように、『労働新聞』の切れ端が見つかっただけでも、市民はスパイの存在を強く警戒するほどであった。

『労働新聞』は、脱北者の暮らす団地の資源ゴミの中にまぎれた『労働新聞』から物語が始まる。同僚から「反共爺さん」(190頁)とよばれる管理人の羅氏は、古新聞にまぎれた『労働新聞』を目にした瞬間、銃口をつきつけられたように慌てふためく。こうした管理人の立ち振る舞いは、朝鮮半島が南北に分断されていることを読者に改めて印象付けるだろう。とくに管理人を務める高齢者たちは、幼少期から徹底した反共教育を受けた世代に属するため、強い拒否反応をみせていた。しかし時間が経つにつれ「あんな新聞一枚で大韓民国が減ぶかね、沈没するのかね」(213頁)と落ち着きを取り戻す。

ただ、ここでは『労働新聞』にあらわれた韓国のもう一つの日常と、ユーモアを感じさせる管理人の羅氏の口癖に注目したい。現代韓国を象徴する風景の一つに、団地のように建ち並ぶ高層マンション群がある。そこには様々な人々の人生が詰まっているが、その日常を陰で支えるのは管理人である。とくに韓国の場合、各棟のあらゆる出入口に管理人が常駐していることが多く、清掃から宅配物の受け取り、ごみの分別、来訪者の案内に至るまで、様々な業務を一手に引き受けている。長時間に及ぶ勤務や劣悪な労働環境は、社会問題として取り上げられることもあるが、『労働新聞』にも時折描かれているように、管理人には仕事の合間にある程度の息抜きが認められていた。管理人室の扇風機に当たりながらランニングで居眠りする千氏や、勤務中に守衛室のカセットコンロで肉を焼きながら、敷地内の菜園で育てた青唐辛子を口にする千氏と羅氏の姿は、高層マンションの住民にとって見慣れた光景である。個人的な話をする、私も韓国留学時代に知人を訪ねてマンション群を何度も出入りした経験があるが、千氏や羅氏の姿はそのとき目にした管理人のおじさんたちを彷彿させた。こうした管理人の視点から、隣人として迎え入れた脱北者の日常を描いた作品として、『労働新聞』を読みなおすこともできるだろう。

次にユーモアな一面についてみてみたい。管理人の羅氏は、日本語訳では標準語話者となっているが、原文ではチョン・ソンテの生まれ故郷でもある半島西南部の方言を話している。そんな羅氏の口癖は「アレ (저시기)」である。チョン・ソンテは「方言の想像力」(2008)という文章のなかで、「アレ」は標準語だが本来の用途からはみ出たとき、別の意味がうまれると述べている。意味もなく「アレ」を連発する羅氏の場合、まさにそれである。羅氏は朝鮮労働党機関紙やスパイなど口にしがたい言葉の代わりに「アレ」を用いる一方、部屋の火災警報器を監視カメラだと疑う脱北者の住民に対して、「アレだよ。火が出たらそれがアレするんだ。水がザーッと噴き出すんだ」(206頁)と説明する。つまり羅氏にとっては「口が回らず意味もなく言っている言葉」(198頁)に過ぎないのだ。「アレ」はときに緊張感を高める言葉として使用されながらも、羅氏が多用することでユーモアに変わるのである。日本語訳でも羅氏の面白さは十分伝わるが、原文で読むとより生き生きとした印象を与える。

次に注目したいのが「えさ茶碗」である。チョン・ソンテは原著の後書きで、「えさ茶碗」はロアルド・ダールの「牧師のたのしみ (Parson's Pleasure)」をわたしたちの物語、すなわち韓国の物語に置きかえたと作品と記している。訳者解説では両作品の関係について深く

掘り下げられていないが、チョン・ソンテは「牧師のたのしみ」をどのようなかたちで韓国の物語に置きかえたのだろうか。両作品は田舎に向かった古物商が、農民を欺き価値ある骨董品を格安で買い取ろうとするも、失敗に終わる物語である。「牧師のたのしみ」では牧師を装った古物商が、18世紀イギリスの筆筒をめぐる農民と交渉する。その過程で、古物商はなんとか筆筒を手に入れようと、脚だけが欲しいと言ってしまう。この発言を受けて、農民たちは運びやすくするため、脚だけをきれいに残して筆筒を粉々に打ち砕いてしまう。

一方「えさ茶碗」には、孤児として寺で育った古物商のジン社長が主人公として登場する。骨董品は商品であるとともに、故郷や家族に対する記憶をもたないジン社長にとって、心の傷を和らげるものであった。幼少期の経験は背景として言及されるだけで、大きな意味を持たない。ただ、ジン社長の設定は、韓国の農村に結婚移住してきたベトナム出身の女性とともに、作家が重きを置く「社会から取りこぼされてしまった存在」(2頁)と括ることができるだろう。これは本書に収録された「見送り」にも共通してみられる特徴である。

ジン社長はベトナム女性の嫁ぎ先で、犬のエサ入れ(本書では、えさ茶碗と翻訳されている)として使われている鉢が、朝鮮時代の貴重な白磁であることを知ると、様々な口実をつけて入手しようとする。白磁のエサ入れを確実に手に入れるべく、ジン社長は犬商人に扮する。ジン社長は用意周到に、トラックの荷台に愛犬のパトラッシュを載せていたのだ。

こうした設定の背景には、韓国の犬食文化がある。韓国で国際大会が開催されるたびに、犬食をめぐる議論は熱を帯びるが、いまでも犬肉を使った料理として夏場に出回る補身湯は有名である。トラックの拡声器から流れる「犬、お売りください。犬、買います。大きな犬、小さな犬も買い取ります」(134頁)という声を聞き、駆けつけた老人たちは、口々に犬の値段を尋ねる。そして食用に飼育された犬をめぐるやり取りがしばらく続く。犬の相場は1頭あたり5万から10万ウォン、約5千から1万円で取引されているようである。

白磁と知らずにエサ入れを愛用する老婆は、一向に犬を手放そうとしない。その理由は「嫁」として迎えたベトナム女性が淋しがると説明される。犬ばかりか、道中が長いことを理由にエサ入れも欲しがるとジン社長に対して、老婆は「晩飯食べていきなさい。私がすぐにベトナム風のフナの蒸し物作ってやるから」(143頁)と、もてなす意図があることを伝える。その直後、パトラッシュの死にそうな鳴き声が聞こえ、ひもを外された老婆の犬が現れるところで物語は幕を閉じる。その状況から、読者はパトラッシュが老婆の犬に襲われたのではないかと推測する。

このように、チョン・ソンテは「牧師のたのしみ」を韓国の物語に置き換える過程で、白磁と犬食文化を取り入れたのである。白磁のエサ入れは、二つの要素を兼ね備えたものとして重要な役割を担っている。一読すると分かるように、あの手この手でエサ入れを買い取ろうとするジン社長よりも、頑なに拒みつづける老婆のほうが一枚上手であった。両者のやり取りは、筆筒にまつわる専門知識を交えて進む「牧師のたのしみ」のやり取りよりも、生き生きとした印象を受ける。なお訳者解説にあるように、この物語は古典落語の「猫の皿」とも共通点があるという。猫とともに、エサ入れとして使用されている絵高麗の茶碗を手に入れようとして失敗する「猫の皿」のくだりは、「えさ茶碗」と瓜二つである。むしろ「えさ茶碗」の後半は、「牧師のたのしみ」よりも猫のエサ入れをめぐる「猫の皿」



に近いともいえる。時代や背景は違えども、滑稽な物語の根本的な構造は変わらないのかもしれない。

書評と断りつつ、中途半端な作品論を展開してきたが、最後に装丁について触れておきたい。本書の装丁は、昨夏急逝された故桂川潤氏が手掛けている。なかでも一段と目を引くのがジャケットを飾る青と緑の「自画像」である。ジャケットをはがすと姿をあらわす表紙にも、紫と黄土色で彩られた同じ顔が出てくる。今回書評を準備するにあたり、本学出版会が企画したリレー講義の一環として、氏が担当された「造本装丁と本づくり」を幸いにも聞くことができた。講義を通して、ジャケットと表紙を飾る顔が18世紀アメリカのニューイングランドに残された墓石の拓本であることを知った。墓石の拓本にあらわれた顔は、すぐに朝鮮半島の仮面を想起させるが、性別や年齢、そして国境を越えた「人間」のイメージとして、ジャケットに使用したという。装丁の背景を踏まえた上で、改めてジャケットに目を移すと、登場人物の顔が走馬灯のように浮かんできた。章扉を飾る作品もすべて桂川氏の手による。装丁の意味も合わせて考えながら、チョン・ソンテの「自画像」に映る等身大の韓国をお楽しみいただきたい。

(柳川陽介)

